



西郷隆盛とは

何者だったのか？



西郷隆盛と大久保利通は、幕末・維新の英傑で、この二人がいなければ明治という近代国家はやって来なかったであろう。西郷隆盛は、文政10年（1828）に鹿児島城下の加治屋町で生を受けた。下級武士の子で、当初は郡方書役助をしていたが、島津斉彬が藩主になると、その才を買われ、江戸出立の庭方役に加えられる。斉彬は次期将軍に一橋（徳川）慶喜を推しており、西郷隆盛はその調整工作をしながら色んな人物と繋がったようだ。その一人が僧・月照。彼を伴って薩摩入りするのだが、斉彬の死後、保守化していた藩は保護せず、西郷隆盛は月照とともに錦江湾に身を投じ自殺を図っている。幸い一死はとりとめたが、奄美大島へ島送りになった。

西郷隆盛は、その生涯で二度の島送り

めた商品が巷に溢れていた。

しかし、考えてみればそれとて変である。西郷隆盛は明治10年（1877）に西南戦争で明治政府に反旗を翻しており、いわば反乱者。それがいつのまにかその汚名をそそがれ、没後12年の明治22年（1889）には正三位を贈られているのだ。

西郷隆盛という人は、色んな意味で風変わりな人物だ。まず、我々が呼んでいる「隆盛」という名は彼の真の名前ではない。彼は51年の生涯において13もの名前を使いわけている。西郷家の嫡男として生まれた時は小吉と呼ばれ、元服すると吉之助、もしくは隆永である。流刑になって菊池源吾と変名し、帰国後、大島姓を名乗ったのは例外として、大半は西郷吉之助というが多い。昔は今と違って諱や呼び名などがあつた。西郷のそれは、名乗りは隆永で、通称が吉之助だった。明治になって新政府に名前を届ける際に吉井友実が間違えた。吉井は西郷の名乗りを忘れてしまい、「確か、隆盛だったか」と登録してしまったのだ。実は、隆盛は西郷の父・吉兵衛の名乗りで、正式には「隆永」である。その登録名を聞いても西郷吉之助は「おいは隆盛でござるか」と平然としており、訂正に行かなかつたそうだ。ちなみに西郷隆盛の弟・従道にも同じような話がある。西郷家は代々「隆」の字を名前につける。当然ながら隆盛の弟・慎吾（これは通称）

にも付いており、正式には隆道という。

ところが名乗りを聞きに来た明治政府の役人が聞こえにくかつたのか、慎吾が字を説明しようと「リュウドウ」と言ったのを聞き間違えて「ジユウドウ」としたので、歴史では隆盛の弟は「西郷従道」と呼ばれている。慎吾も訂正しに行っておらず、あつけらかんとしていた。そんな大らかさがこの兄弟にはある。

もう一つ、不可思議な話を書いておく。それは、今の世に伝わる西郷隆盛の肖像画が正確には本人のものではないという話。幕末期に写真技術が日本に入ってきたおかげで多くの偉人達の顔を知ることができる。有名なのは坂本龍馬の写真。数枚ある中で知られているのは慶応3年（1867）に長崎の上野彦馬か、その弟子・井上俊三が撮つたと思われる一枚だ。このように新しい技術で面白がつて色んな人物がその姿を残している。だが、西郷隆盛には一枚も写真がない。顔を晒してしまうと命を狙われるから嫌つたとの説もあるが、単なる写真嫌いだったのではないだろうか。

我々が西郷隆盛と崇めている肖像画は、明治11年（1878）にイタリア人の銅版画家・キヨッソーネが描いたもの。当然ながらキヨッソーネは、西郷隆盛と面識がなく、弟の従道といこの大山巖を参考にして描いている。これが意外と似ているとの証言もあったためにこの肖像画がよく使われているのだ。上

になっているのだが、薩英戦争を経験して混乱した薩摩にはどうしても彼が必要で、盟友・大久保らの働きかけもあつて幕末動乱期に復帰。その後、歴史に名を残すほどの活動を果たすのだ。

斉彬政権下で東奔西走したり、勝海舟などの有力人物と知己を得たりしていたのでそれまでも多くの無名ではなかったが、戦でさらに名を高めた。西郷隆盛の初陣と呼ばれるのは38歳になってから（動乱期でも戦争はないので仕方ないことだが）。禁門の変（蛤御門の変）がその舞台である。これは文久3年8月18日の政変で京を追われた長州勢が奪回を図るべく、攻め入った事件である。ここで西郷隆盛は洋式銃隊を率いて指揮を取り、苦戦する会津・桑名両藩を助けて長州勢を撃退している。この働きにより京に駐在していた大名家の藩士にその名が轟いたという。

今でこそ坂本龍馬が幕末期の人気No.1人物といわれているが、司馬遼太郎が「竜馬がゆく」を上梓するまでは、マイナーな人物だった。現に司馬は龍馬をモデルに小説を書くとき決めた時、知人から「なぜそんなマイナーな人物を主役にするのか」と問われている。ところが同書がベストセラーとなり、内容も面白かつたのでその人気は鰻登りになっていき、幕末第一級の英傑と思われるに至つた。それまでは西郷隆盛がそのポストに座っており、彼を模した貯金箱や彼を絡

しよに帰ろう」と誘う中で彼が言うのは、「お前達は隊士だから交わりが少ないが、私は接することが多かつたからか彼の魅力の虜になってしまっている」との理由。だから共に死ぬしかないと帰国の隊長は城山で亡くなっている。こういった魅力は薩摩の人達は肌で感じていたと思われる。だから城山での自刃以降も西郷隆盛を伝説の英雄として持ち上げたのだ。今、坂本龍馬が人気No.1となっているのは、少々理由づけが違うように思えてならない。

（文／ジャーナリスト・曾我和弘）

